

2020. 8. 9 (日) マタイ 21 : 33 ~ 41

21:33 もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がいた。彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。

21:34 収穫の 때가近づいたので、主人は自分の収穫を受け取ろうとして、農夫たちのところにしもべたちを遣わした。

21:35 ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。

21:36 主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。

21:37 その後、主人は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、息子を彼らのところに遣わした。

21:38 すると農夫たちは、その息子を見て、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合った。

21:39 そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしまった。

21:40 ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょうか。」

21:41 彼らはイエスに言った。「その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の 때가来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」

<説教>

「もう一つのたとえを聞きなさい。」(33)とイエスが言って続けてお語りになった相手は、「祭司長たちや民の長老たち」(23)、つまりユダヤ人の宗教的また政治的な指導者たちでした。

「祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちについて話しておられることに気づいた。」(45)とありますから、「祭司長たちとパリサイ人たち」と「祭司長たちや民の長老たち」とは同じ人々と考えていいでしょう。

二人の息子のたとえ(28 ~ 32)では、彼らが神のみこころに従って来なかった罪を、また彼らが今なお悔い改めていないという罪をイエスは明らかになさいました。

そして「もう一つのたとえ」でも、彼ら(と彼らの先祖たち)のこれまでの罪を、そして彼らがこれから犯そうとしている罪をイエスは明らかになさいました。

そして更にはそんな罪に対する神のさばき・審判についても明らかになさるのでした。

同時に「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」(23)と言う彼らの問いにお答えになりました。

そんな「もう一つのたとえ」を私たちも聞きましょう。

21:33 もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がいた。彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。

21:34 収穫の 때가近づいたので、主人は自分の収穫を受け取ろうとして、農夫たちのとこ

ろにしもべたちを遣わした。

21:35 ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。

21:36 主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。

21:37 その後、主人は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、息子を彼らのところに遣わした。

21:38 すると農夫たちは、その息子を見て、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合った。

21:39 そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしまった。

「ぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た」「ある家の主人」(33)とは天の父なる神のことです。

「ぶどう園」は先のたとえでも出てきましたが、「神の国」(43)のことです。

なお、「神の国」とは「神の王国」ですから、神が王として神の民を支配なさる国であり、また神の御支配そのもののことでもあり、神の民が神の御支配のもとで生きる幸いのことでもあります。

「ぶどう園」の、また神の家の「主人」である神はユダヤ人をただ恵みによって神の国の民、神の民としてお選びになり、エジプトの奴隷から解放してくださいました。

彼らが神の恵みに与った神の民としてふさわしく生きて、世界に神の栄光を表すように、神は彼らに律法をお与えになり、ご自身のみこころをお示しになりました。

また最初は幕屋を指示通りに造らせ、後には神殿を指示通りに造らせ、そこで行うべき儀式や祭りも指示なさいました。

そうやってやがて神が地上にお遣わしになるメシヤ、御子キリスト・イエスをお示しにもなりました。

(その御子キリスト・イエスを表しているのが、このたとえで「私の息子」(37)と主人が言う「息子」です。)

さて、そうのようにして神はご自分の民のために、彼らが神に信頼して神のみこころに従い、神のみこころを行って神の栄光をこの地上で表して生きるために必要なことは全て神が教えて下さり、備えてくださいました。

「ぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て」たとはそういう神の民に対する恵み深い、十分なみわざ、ご配慮を表しています。

「さあ、わたしは歌おう。わが愛する者のために。そのぶどう畑についての、わが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹にぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こして、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。」とイザヤ書5：1-2に書かれています。

しかし神の民の歴史は、そんな恵み深い神に対する罪、反逆の歴史でした。

今見たイザヤ書の続きは「ところが、酸いぶどうができてしまった。」(5:2)でした。

神がご自分の民に要求し、期待なさったことは、彼らが神の律法に従い、神だけを拝み神だけに仕え、義とあわれみのわざを行い、地上で神の栄光を表すことでした。

そのために、王を始めとする民の指導者たちがまず神に従い、民に神の律法を正しく教えて、民を神の民としてふさわしく、神を愛し隣人を愛して生きるように正しく導いていく必要がありました。

そういう「収穫」を「主人」に忠実に納める責任を負う、神の民の導き手なる人々が「農夫たち」にたとえられたのです。

しかし「農夫たち」はしばしばその責任を果たし得ませんでした。

それはもちろん彼ら自身の罪と人間的な弱さの故です。

それで「農夫たち」に神（「主人」）のみこころを教え、神に立ち返るように、民を正しく導くように呼びかけるために神は「農夫たちのところにしもべたちを遣わし」ました。

「しもべたち」とは神の預言者たちのことです。

最初の預言者エリヤに始まり、最後の預言者マラキに至るまで、旧約時代には400年以上に渡って神は忍耐強く、あわれみ深く、預言者をご自分の民とその指導者たちのところにお遣わしになって来ました。

しかし、神の預言者たちはことごとく民の指導者たちまた民から迫害されました。

「神はこう語っておられる。偶像を捨てよ。偶像礼拝を止めよ。神に信頼して立ち返れ。神を愛し、隣人を愛し、神のみこころを行え。」

そんなことを人を恐れず神を恐れ、神に従順に、忠実に語る預言者たちは皆“苦難のしもべ”として歩むほかありませんでした。

「ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。」(35-36)とはそういうことです。

領主ヘロデに殺されたバプテスマのヨハネもそんな最後の（旧約的）預言者でした。

このように神の「しもべ」は皆“苦難のしもべ”であるほかありませんでした。

神がこのように何度も、また何年にもわたってご自分の「しもべ」を「ぶどう園」に限りない忍耐とあわれみをもってお遣わしになったのは、神の民が、殊に「農夫たち」が悔い改め、神に立ち返ることを願い、待ってのことでした。

しかし「農夫たちは彼らにも同じようにした」のです。

最後に、「主人は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、息子を彼らのところに遣わし」ました。

（既に言いましたように）この「私の息子」が神の御子、約束のメシヤ、キリストなるイエスのことです。

ここにイエスはご自分が神の「息子」であり、多くの「しもべたち」と同じように神によって「遣わ」された者、「天から」(25)の者であることを祭司長たちや民の長老たちに明らかになさいました。

それが「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」(23)という彼らの問いに対する明確なお答えでした。

そのイエス・キリストを前にして、神の権威そのものであるお方に対して彼らはずおれ、イエスを信じ、悔い改めたでしょうか。

そうではありませんでした。

納めるべき主人の収穫を正しく納めなかったどころか、また、何人ものしもべたちが来

でも聞かず、悔い改めず、殺してしまったどころか、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合いました。

つまり収穫どころか主人の「ぶどう園」そのものをも丸ごと自分たちのものにしよう、自分たちが「ぶどう園」の主人になろうと、言うならば究極の食欲、また傲慢に至ったのでした。

「そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしま」いました(39)。

もちろん、それがイエス・キリストを十字架につけて殺すという彼らの罪を表しています。

神はご自分の御子イエス・キリストによって、ご自身の無限の恵み、あわれみ、愛、忍耐を、また神の権威を最終的決定的に彼らにお示しになりました。

ではそのことに彼らは恐れ入り、神の前にへりくだり、素直に神に感謝し、神がお遣わしになったイエスを信じ、神に立ち返り（悔い改め）、神に捧げるべき収穫（それはまず自分自身であり、また自分たちが教え導く民ということですが）を神に捧げ、神を讃美し、神に栄光を帰したかと言え、そうではありませんでした。

全く逆でした。

ここに彼らの一いやもはや彼らだけではない、私たちも省み認めなければならない人間（罪人）の一強情さ、頑固さが見られます。

神の限りないあわれみ、恵み、忍耐が現されれば現されるだけ、彼らの底なしの罪の闇、深さが露わになったのでした。

そんな彼らに対する神の審判を、イエスはたとえの最後に、彼らとの問答を通して明らかになさいました。

21:40 ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょうか。」

21:41 彼らはイエスに言った。「その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の時が来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」

先の二人の息子のたとえのときと同じように、ここでも彼らは当然のように答えています。

「そんなひどいことをする『悪者ども』は『情け容赦なく滅ぼ』され、『ぶどう園』は彼らから取り去られ、『収穫の時が来れば収穫を納める』忠実な『別の農夫たちに貸すでしょう』と。

こうして彼らはここでも自らの口で『自分たちは神のみこころのとおりにしていない』と告白させられたのでした。

また、そんな『悪者ども』自分たちの受ける審判を自分たちで定めるといふ何とも皮肉と言うか、実に厳しい神のお取り扱いでした。

神がお遣わしになった最後の真の“苦難のしもべ”キリスト・イエスをどこまでも拒み、イエスを信じることを拒み、キリストを通して神に立ち返ることをみ、キリストによって明らかにされた神の愛、恵みを否定し侮り、最後の最後まで反逆し続ける者に対しては、神は「情け容赦なく滅ぼす」恐るべき最終審判者、復讐者としてご自身を示されるほかないのです。